

NHKドキュメンタリーの源流 それはラジオから始まった

宮田章著



熊本での『街頭録音』収録『新憲法について』 (1947年3月12日) 写真提供 NHK

【表紙写真】

街頭録音「新憲法について」

46年11月に日本国憲法が公布されると、『街頭録音』は「新憲法について」というテーマで全国各地を巡って人々の声を聞いている。東京を振り出しに12月には名古屋、大阪、仙台、47年2月に広島、札幌、3月に熊本、5月に松山を巡回した。熊本で行われた収録の写真が残っている。一本のマイクのまわりに信じられないほどの人数が集まっている。冷戦期に構造化された左右対立がまだない時代、人々は国民主権と平和主義を掲げる新憲法について何を語ったのだろう。

もくじ

はじめに 7

第1章 録音構成の始まり 11

ラジオの時代の創造性/録音構成という形式/『長崎の印象』/戦時下の録音構成/

第2章 『街頭録音』 17

民衆へのマイクの開放/『街頭にて』/アナウンサー 藤倉修一/『街頭録音』の覚醒/噴き出した民衆の声/

第3章 『街頭録音 ガード下の娘たち』 31

絶好調の中での冒険/『ガード下の娘たち』を聴く/作品性・作家性の成立/闇の探訪/人間性を引き出すインタビュー/揺れる結論/闇の探訪の拡大/アメリカのラジオドキュメンタリーとの比較/『二十の扉』

/ 「インフォメーションアワー」/

第4章 『社会探訪』の輝き 51

「インフォメーションアワー」の不評/闇の時代に/プロデューサー 小田 俊策/プロデューサー 中道定雄/カストリパラダイス事件/アナーキー な人々/チャンバラ放送/ほんとうの声/『夜の東京 プラットホームの 巻』/敗戦国のリアリズム

第5章 『社会探訪』の衰退 77

時代の転換/悪いニュース/『明暗・秋祭り』/『学生社長 人生哲学』 / 『浅草のジャングルを行く』/「無念流」の後退/『山窩の背振を訪ねて』

終章 戦後民主主義の申し子 95

世の中が落ち着いて来て/「ドキュメンタリー」の迷走/録音構成は生き 残った/戦後民主主義の申し子/三人のその後

注 105 あとがき 109

[付録] 111

日本放送協会編(1949)『ラジオ社會探訪』より転載 『社会探訪 夜の東京・プラットホームの巻』(1948 年 7 月 29 日放送)

はじめに

将来に対する希望とかは持ってないの? そりゃあないってことはないでしょう、人間ですもの

時期は1947年(昭和22年)のある日の夜、場所は、東京・有楽町のガード下、質問しているのは日本放送協会のアナウンサー藤倉修一、答えているのは、「らく町のおときさん」と呼ばれる女性であった。今では想像がつかないかもしれないが、終戦から間もないこの時期、有楽町・新橋一帯では省線(今のJR線)のガード下を中心に、「パンパン」と呼ばれる街娼がたくさん出没していた。おときさん(本名、西田時子)はこのとき19歳、年少ながら150人というパンパンたちに「おねえさん」と呼ばれる存在だった。冒頭のやり取りは、見かけない男がやって来て、自分たちのことを根据り葉掘り聞いてくるという配下の知らせを受けたおときさんが、男と話をする中で生まれた言葉である。電灯がつかないガード下の闇は深く、そのうえ藤倉アナウンサーはマイクをコートの袖口に隠すようにしていたので、おときさんはこの会話が、ラジオ番組のインタビューであることに気づかなかった。

パンパンも人間であり、「将来の希望」を持っているというおときさんの声は、1947年(昭和22年)4月22日、『街頭録音 ガード下の娘たち』というタイトルで全国に放送され、大評判となった。藤倉アナウンサーのもとには「あの録音を聞かせてくれ」という新聞や雑誌の記者が殺到したという。聴く者にとってまず新鮮だったのは、パンパンの肉声がラジオから聞こえたということであった。声の内容も良かった。人間である以上、希望がなくなるということはないという言葉は、猛烈なインフレと食糧難の中で、今日一日を何とか生き抜こうとする多くの人々の共感を呼んだ。

本書は、録音構成と呼ばれたラジオ番組から、占領期の庶民の生々しい 声を紹介していく。録音構成とは、市井の人々の声を録音して、それを編 集し、さらにナレーションや音楽を付加して、一本の番組に仕上げる形式 である。今ではラジオドキュメンタリーと呼ばれることも多い。屋外に持ち運び可能な録音機の普及とともに 1930 年代の後半から制作が始まり、60 年代以降、テレビドキュメンタリーに取って代わられるまで放送におけるドキュメンタリーの中心であった。

NHK(1946年からの呼称で、それまでは日本放送協会)の放送と言えば、権力者発、あるいは各分野の専門家発の知識や情報を「上から下へ」下げ渡すタイプの印象が強い。その最たるものは、戦争を終わらせた天皇の玉音放送であろう。ラジオドキュメンタリーの領域でも占領期には、新たに君臨を始めた GHQ の方針や施策を「上から下へ」伝えようとする作品(番組)が多数制作されている。ただ、権力者や専門家によってオーソライズされた情報を伝えるタイプの番組は、NHK の放送ではある程度いつの時代にも見られるもので珍しくはない。本書が中心的に取り扱うのは、こうした上意下達タイプではなく、この時期ならではの庶民の生々しい声が記録されたタイプである。具体的には『ガード下の娘たち』や、この作品の成功を受けて始まった、『社会探訪』(1947~51)という定時ドキュメンタリー番組について、本書は詳しく述べる。

『ガード下の娘たち』や『社会探訪』が描こうとしたのは、戦前・戦中のシステムが崩壊し、次のシステムがまだ固まっていない時期に現れた、いわば裸の人間性である。敗戦によって社会というものが半ば壊れ、人間がむき出しになった時代の現実を描いたと言ってもよいだろう。マイクの先にいたのは、ガード下にたむろするパンパン、戦災で帰る家と親を亡くした疎開児童、満員電車の中で仕事をする少女スリ団、街角のゴミ箱に寝起きしながら人生哲学を語る男、子どもを連れて山野を巡り歩く「サンカ」の一家……、いずれもシステムから離れて生きる人々であった。しかし、彼ら彼女らの声からは日々を生き抜く力強さが感じられる。

こうした人々にマイクを向けた作り手(取材者)の姿勢もまたユニークであった。『ガード下の娘たち』や『社会探訪』を制作した藤倉アナウンサーたちは、マイクの先にいる人々を、売春婦問題だとか、孤児問題だとか、車内スリ問題とか、浮浪者問題といった各種の問題を例示する存在だとは考えなかった。自分たちが設けた問題の枠組みの中に、マイクの先にいる人々の人間性を押し込もうとはしなかった。むしろ藤倉たちは、パンパン

やゴミ箱に寝起きする男といった取材相手の中に、特定の問題の枠組みを超えるような「人間」を発見している。作り手は取材相手の声に接して驚いたり、たじろいだり、教えられたりしている。権力者発の、あるいは専門家発の情報を「上から下へ」行きわたらせようとする姿勢から、これほど遠い NHK ドキュメンタリーは珍しい。

『ガード下の娘たち』が放送されて評判をとったのとほぼ同時期(1947年6月)に出版され、ベストセラーになった『堕落論』の中で作家、坂口安吾はこう述べている。

戦争は終わった。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているではないか。人間は変わりはしない。ただ人間に戻ってきたのだ。人間は堕落する。養士も聖女も堕落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は堕ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。

体裁をかなぐり捨てて、今日この日を生きるために必死になる。安吾は「堕落」の世相の中に人間性の回復を感じ取っている。藤倉たちが描き出したのも、戦後の混乱期を生きる人々の裸の人間性の魅力であった。人間は身一つで生きられる。そのように生きられている実感があるから将来に希望も持てる。このメッセージは、生活の隅々にまでシステムが張り巡らされ、ともすれば、システムに従う以外には生きようがないと感じてしまう現代の私たちにとって新鮮である。

第2章 『街頭録音』

民衆へのマイクの開放

1945年(昭和20年)9月下旬のある日、日本放送協会のアナウンサー藤倉修一は同僚のアナウンサー数人と米兵が運転する車に乗って、東京・内幸町の放送会館から街に出た。有楽町、銀座方面は一面の焼け野原だった。

戦争が終わって、日本放送協会のあるじはアメリカ人になった。日本の 敗戦に伴って進駐してきたアメリカを中心とする連合国軍は、内幸町の放 送会館を半ば接収、9月22日「日本ニ与フル放送準則」(ラジオコード) を発表した。日本のラジオ放送(テレビ放送はまだない)は全面的に GHQ(連 合国総司令部)のメディア担当部署である CIE (民間情報教育局)ラジオ 課の指導下に入った。矢継ぎ早に出された多くの指示のうち、際立った印 象を与えたのは、ラジオのマイクを民衆に開放することであった。ほんの 一月あまり前に行われた天皇の玉音放送にその極致が見られるように、戦 中のラジオは上意下達のメディアという性格が強かった。しかし CIE ラジ オ課のオフィサーたちは、このメディアに市井に暮らす民衆の声を流すこ とによって「民主日本」を表現しようとしたのである。

藤倉たちが詰めていたアナウンスルームには、市井の人々にマイクを向けて自由に意見を述べてもらう番組を始めるので、担当を希望する者は名乗り出るという通達が来た。藤倉ら数人のアナウンサーがそれに応じた。どんな番組になるのか詳しいことは誰にもわからない。市井の人々の声を録音し、それを編集して放送するという方針があるだけだった。焼け野原を行く車には藤倉たちのほかに録音機が積み込まれていた。

アナウンサーたちは一人ずつ、適当な場所で車を降り、マイクのコードを引きずりながら道行く人々にインタビューを試みた。インタビューのテーマはあらかじめアメリカ人によって決められていた。「戦争が終わってどう思うか」というものであった。人々の多くは唐突に突き付けられたマイ

クに驚いて逃げ出してしまったようである。坂口英一郎アナウンサーにマイクを向けられた銀座のデパートガールは「主任さんに聞いてから返事をします」と答えた。いきなり難しいことをきいてもダメだと考えた藤倉は、日比谷公園付近で12~3歳の子どもに「チョコレートは好きですか」と切り出した。しかし「チョコレートってナアーニ」と返されて後が続かなかった。

『街頭にて』

マイクを向けられた多くの人は逃げ出してしまったが、応じてくれた人 も少しはいた。NHK に残る放送記録によれば、この日の録音を編集した 15 分番組が『街頭にて』という番組名で 1945 年 9 月 29 日に放送されて いる。10月以降『街頭にて』は、月、水、金の週3回、お昼の12時台に 放送される 15 分番組として定時化された。ただマイクを向けると多くの人 が逃げ出してしまうという状況は容易に改善しなかった。藤倉の回想によ ると、『街頭にて』の収録方法は、銀座、新宿、浅草といった盛り場に録音 自動車を進出させ、通行人の中から「一くせありそうな意見のありそうな 人を物色して」録音自動車に連れ込み、そこで「アナウンサーがいろいろ と質問して意見を述べてもらうという形式」であった。複数の人の声をつ なげて放送するスタイルであったが、話し手はなかなかつかまらず、一人 の人に「十分も十五分も喋らせる」ために、「街頭の背景はあっても話はス タジオの講演型」になり、「どうも思った程の効果が挙がらなかった」という。 しかし、CIE はこの番組をあきらめなかった。民衆にマイクを開放する ことで、日本において思想と言論の自由が実現されていることを内外に示 すという意志は固かった。民衆へのマイクの開放が試みられたのは『街頭 にて』だけではない。市井の人々からの投書を読み上げる『私たちの言葉』 (45年9月19日『建設の声』として初回放送、46年11月に改称)、『放 送討論会』(45年11月21日『討論会―天皇制について』として初回放送、 46年4月に改称)といった番組からも、新時代の政治や社会や人間につ いて語る民衆の声が聞こえるようになっていた。硬い番組ばかりではない。 46年1月19日には『のど自慢素人演芸会』がラジオ放送された。芸能の

領域でも民衆(素人)にマイクが開放されたのである。『のど自慢素人演芸会』は今もテレビで放送されている『NHK のど自慢』の前身である。毎週日曜日のお昼時に流れ続ける素人の和気藹々としたうた声は、戦後民主主義の産物である。

46年1月、『街頭にて』に転機が訪れる。新たなラジオ課のオフィサーとしてラルフ・B・ハンター少尉(当時25歳)が着任し、『街頭にて』の制作を指揮することになった。日本に言論の自由があることを知らしめる番組であればどう作ってもよいと上司に言われていたという。ハンターがまず行ったのは、自分の右腕となる日本人を選ぶことであった。彼は藤倉修一を選んだ。それまで数か月の間『街頭にて』を回り持ちで担当していたアナウンサーたちは、それぞれ語り口やインタビューの技量をテストされていた。藤倉はそのテストに合格したのである。

ハンターと藤倉は『街頭にて』のテコ入れに取り組んだ。46年5月、『街頭にて』は『街頭録音』と改称する。番組名とともにいくつかの点が変更された。まず放送は週3回から1回に減った。ただ1回あたりの放送時間は15分から30分に延びた。また番組の顔になる人物が決められた。『街頭にて』のインタビュアーは何人かのアナウンサーの回り持ちだったが、『街頭録音』のメインインタビュアーは藤倉となった。それだけではない。藤倉にはプロデューサー権限も与えられた。ハンターの指揮下にあることは動かないが、スタッフの選定、地方での収録をどこにするかなども含め、制作実務のかなりの部分が藤倉の判断に委ねられることになった。

アナウンサー 藤倉修一

ここで藤倉修一という人物のプロフィールを述べておこう。生まれは 1914年(大正3年)、東京・御徒町にあった裕福な綿布問屋の長男として育った。本人の回想によれば、藤倉はそこの若旦那として「お店も繁盛、近所の下町娘や美しいデパートガールに追ひかけられると云う、至極平和な」人生を夢見ていたという。戦前の東京下町に生まれ育ち、そこでの生活を愛していた人物であった。しかし、そんな藤倉の人生は 1938年(昭和13年)、「支那事変」後の統制強化の中で発令された「もめん禁令」によって一変す

る。店は休業を余儀なくされ、若旦那は将来の展望を失った。「一片の政令によって、一夜のうちに楽しい夢と希望を打ち砕かれ、生活権まで奪われて」と藤倉は嘆いている。1940年、藤倉は26歳で日本放送協会(当時は単に「放送局」と呼ばれることが多かった)の試験を受け、アナウンサーとなった。徴兵はされず、戦地の経験はない。戦争末期には軍の嘱託として空襲警報を読み上げる日々であった。性格的には「下町育ちのガラッパチ」を自認しており、学業優秀な秀才型とは一線を画していた。

1946年当時藤倉は32歳。ハンター少尉に気に入られ、『街頭録音』の制作実務をほぼ一手に取り仕切っていたにもかかわらず、藤倉は悩んでいた。マイクを向けると相手が逃げ出してしまう状況は続いていた。記念すべき『街頭録音』の第1回『貴方はどうして食べていますか』(46.6.3 放送)では、道行く人々に2時間かけてインタビューを仕掛けたにもかかわらず、応じてくれたのは6人だけだった。藤倉の言葉を借りると、マイクを向けられた人は「ピストルでもつきつけられたように飛び上がって」逃げていった。「一体この放送は日本で成功の見込みがあるのだろうか」と藤倉は弱音を吐いている。「考えれば考える程ユーウツ」だった。

『街頭録音』の覚醒

収録方法が変更され、その効果があらわれ始めたのは、『街頭録音』がスタートして3~4か月たった46年の秋からである。藤倉たちは、「あなたのご意見を」とこちらから問いかけるやり方をやめて、相手の方からやって来るのを待つことにした。具体的には、銀座の資生堂前の広場など特定の場所に演壇を設けて『街頭録音』の看板を掲げた。まず「ここで何かありそうだ」と人々の関心をかき立てたのである。そして収録開始時には、あらかじめ待機してもらっていた4、5人の発言者に口火を切らせた。これなら人々はいきなり自分の意見を求められることはない。野次馬気分で他人の話を聞いているうちに、その場の雰囲気に釣られて自分も何か言いたくなることもあるだろう。

このやり方は成功した。演壇の周りに集まった人たちは次第に自分から 発言を求めるようになった。残念ながら音源は残っていないが、藤倉が 1948年に出版した著書『マイク余談』に再録された『街頭録音』初期の民衆の声を紹介しよう。

46年12月銀座・資生堂前で収録された『都会から農村に望む』(46.12.17 放送)では、食糧難に悩む都会人の農村へのうっぷんが噴出している。藤倉によれば「茶の背広の方」が「スルスルと壇上に」登ってこう言った。

農家は今、箪笥の中から、カマスの中まで新円をつめ込んで、ニタニタしているそうですがこの金たるやですな、食生活になやむ我々都会人の血の出るような懐の中からしぼりあげたものでして、我々は今では着ているものを、筍のように一枚一枚脱がされて皆んな農家に取り上げられているのだ。

2日後の12月19日、番組は『農村から都会に望む』と題して福島県のある大きな農家の庭先に村人を集めて、その声を放送した。「おとなしそうな髯もじゃのお百姓さん」に、藤倉が大雪は豊年の兆しだから来年は豊作でしょうと水を向けると、こう切り返された。

都会の人はそんな非科学的なことを云って安心しているかもしんねえが、雪は肥料じゃないから役に立たねえだ。これが、みんな硫安だったらなアと農村のものは皆んな考えているだよ。一体、肥料が足んねえのは都会の工場の働きが足んねえからだ。ストライキをやったり、肥料さヤミに流したりして、全く良くねえこンだと思う。

いったん口を開くと、人々の声には生活実感に裏付けられた迫力があった。スタジオで投書を読み上げる『私たちの言葉』や、日比谷公会堂というあらたまった場所で収録される『放送討論会』にはない、『街頭録音』ならではの生々しい熱気が感じられた。放送が火曜と木曜の週2回になった46年10月頃を境に『街頭録音』は、毎回収録場所が黒山の人だかりとなる人気番組となった。演壇が設けられることが多かった銀座・資生堂前での収録風景は「銀座名物」と呼ばれるようになり(写真1)、藤倉は通りが

かりの人をマイクを持って追いかける代わりに、演壇の上に立って、次々と登壇してくる人々にマイクを向けるようになった。「4、5人の発言者」を待機させておく必要も徐々になくなっていったようである。



写真1 銀座・資生堂前での収録風景 (1947 年 2 月) 写真提供 NHK



写真2 街頭録音 片山首相を迎えての収録に詰めかけた人々 (1947年6月) 写真提供 NHK

噴き出した民衆の声

『街頭録音』は民衆の生き生きとした声をつかまえることに成功した。番組がいったん評判になると、民衆の声はますます熱気を帯び、番組の評判をますます高めていった。『マイク余談』に採録された声の紹介を続けよう。47年2月4日放送の『魚の問題について(二)』は、東京・築地の中央卸売市場で録音された。「火事場のような威勢のいい取引風景を予想していた」藤倉たちは、仲買人たちは集まっているものの、「魚の入荷が全然ない」「火の消えたように閑散」とした市場の様子に驚いてしまう。「ねじ鉢巻の若い兄い」に聞くと、東京都だけ公定価格がやかましいから、魚はみな地方に逃げてしまうのだと言う。

地方地方で取締が不公平なんだヨ、東京だけ厳重にやったって埼 玉や、千葉を取り締まらないから駄目だ。チョッと川を越して赤 羽の先へ行けば魚は高いが何だってある。だから東京の消費者は わざわざ大宮や船橋まで買出しに行ったり闇屋の背負込みものを 買ったりするんだ!

別の男が「丸公(注 公定価格)を撤廃すれば魚はどんどん出るヨ」と言うと、「そうだそうだ」、「その通り」という声が場内一斉にかかった。

一週間後に藤倉たちは、瀬戸内海の漁港に場所を移して、『魚の問題について(三)」を収録した(47.2.11 放送)。ここでも統制に対する不満がさんざん出た。最後に「四十がらみのおかみさんが乗出してきて」、「通訳が要るほどの土地弁」でこう言った。

生活必需品がヤミで高いのに、魚だけ丸公にしろと言ったって無理ですヨ。……米でも塩でも酒でも何でも丸公で買える様にしてくれなくては不公平でしょう。

「成程、ごもっともなことで……」と藤倉のマイクは「一言もなく神妙に引き下がらざるを得な」かったと言う。

東京の渋谷駅前で収録された『婦人の声 台所から見た耐乏生活』(47.9.2

放送)では、闇市での買い出しを非難する声に反応して「五十位の紺の粗末な洋服を着た御婦人」がこう言った。

今の配給で親子六人が生きて行けますか。私達は何にも欲得や、もの好きで買い出しをやっているのではありません。混雑する乗物で死ぬ思いで、田舎から、ようやく買って来た少しばかりのお米や、お藷を警察の方は統制違反だといって訳も聞かずに取り上げてしまう……。一体政府は私たちに闇をせずに死ねとでも云うのですか。

「その心からほとばしる一語一語がマイクを感動」させたと藤倉は記している。この「御婦人」は警察も政府もおそれていない。むしろ親子六人が生きるために統制違反も辞さないことを堂々と表明している。藤倉の『マイク余談』を読むと、番組はこうした主体的な発言者を歓迎し、実際に、時事問題についての自分の思いを、自分の言葉で堂々と語る数多くの発言者を得ていたことがわかる。『街頭録音』というラジオ番組の収録の中で、民主主義は確かに現実のものとなっていた。



写真3 渋谷駅前での収録『台所から見た耐乏生活』 (1947年9月) 写真提供 NHK



写真4 『台所からみた耐乏生活』の収録、レコード盤に録音中写真提供 NHK

時期が前後するが、46年11月に日本国憲法が公布されると、『街頭録音』は「新憲法について」というテーマで全国各地を巡って人々の声を聞いている。東京を振り出しに12月には名古屋、大阪、仙台、47年2月に広島、札幌、3月に熊本、5月に松山を巡回した。熊本で行われた収録の写真が残っている(表紙写真)。一本のマイクのまわりに信じられないほどの人数が集まっている。冷戦期に構造化された左右対立がまだない時代、人々は国民主権と平和主義を掲げる新憲法について何を語ったのだろう。残念ながら資料は残されていない。ただ『街頭録音』というラジオ番組が、焼け跡がまだ生々しい街々に、権力者や専門家でなくても国家の最高法規についてものが言える場所を作り出し、その声を全国に伝えたことは確かである。

藤倉は『街頭録音』の意義を次のように語っている。

今迄、放送局のスタジオの中にばかり押し込められて、大臣とか博士とか所謂、名士やお偉い方々ばかりに独占されて、お説教の取次ばかりやっていたマイクロフォンを、青空の下、巷の雑踏の真っ只中にほうり出して大衆に開放したのだから、恐らく日本放送史上前例のない画期的な出来事であったわけである。

「青空の下」、「巷の雑踏の真っただ中にほうりだして」といった言葉に、この番組を包んでいた時代の開放感がよく表れている。『街頭録音』から聞こえる声の主は、「名士やお偉い方々」ではなく市井に暮らす民衆であった。番組は「上から下へ」ではなく、「下から上へ」、あるいは「下から下へ」民衆の声を伝えたのである。当初その声を生き生きとした形で収録するのは容易ではなかったが、藤倉たちは収録方法を工夫して問題を克服した。噴き出した民衆の声は、この番組を目覚ましい人気番組に押し上げた。前記した藤倉の著書『マイク余談』は、『街頭録音』の司会者として人気者になった藤倉が1948年5月に出版したものであるが、この本には、2人の人物が序文を寄せている。一人は、藤倉を「今日 NHK の花形 NO.1」という表現で持ち上げる当時の日本放送協会専務理事、古垣鉄郎(後に会長1949~56年)、もう1人は CIE ラジオ課のラルフ・B・ハンター少尉

藤倉氏の私に語るところによれば、この番組の究極の目的は、言論の自由が、日本に於て現実に存在することを、日本国民に知らしめるためであるとのことです。従って、同氏は、国民に自由に語らしめることによって、多くの人々に関係ある問題につき、各個人が自由に意見を交換しうることを希望しているのであります。

である。ハンターは『マイク余談』の序文にこう記している。

当時のGHQ/CIEにとって、ある政策が占領当局の押し付けではなく、日本人の意志で行われたと主張することは重要であった。「藤倉氏の私に語るところによれば」という言葉は、おそらくハンターがとってつけたもの

である。日本に「言論の自由が存在する」ことを日本国民に知らしめよう としていたのは、第一にハンターとその上司たちであった。ただ、それが 誰のイニシアティブであったかには関係なく、言論の自由は市井の日本人 に歓迎され、それが「現実に存在すること」を広く伝えた『街頭録音』は、 民衆へのマイクの開放を象徴するラジオ番組となった。

GHQ/CIEのメディア政策は、押し付け、お仕着せとして批判されることも多い。実際、ハンターたちが言う「言論の自由」には占領者に対する批判は含まれなかったし、占領者側の一方的なプロパガンダという印象を与える番組も少なからずあった。『街頭録音』にしても各回のテーマは CIE が指定ないし承認したものであった。民衆へのマイクの開放とは言っても所詮アメリカ人の手のひらの上での話だったと主張することは可能である。しかし、CIE の指導下にあったという理由だけで、占領期のラジオ番組を一括りに価値のないものとすることはできない。『敗北を抱きしめて』の中でジョン・ダワーが指摘したように、占領者の政策をお仕着せのものから、自分たちの血の通うものに変えた日本人の仕事は少なくなかった。45年9月に藤倉たちが命じられた焼け野原でのインタビューは、マイクを向けられた側にとってはまさに押し付けで、うまくいったとは言えない。しかしその後藤倉たちは粘り強く、民衆へのマイクの開放を実のあるものにしようとした。その努力は『街頭録音』において実を結んだと言っていい。

ただ、藤倉たちの物語は、日米合作が功を奏したシンプルな成功譚としては終わらない。藤倉の仕事が真にユニークな価値を帯びてくるのは、ここまでに述べた『街頭録音』の成功以後である。その仕事は、ハンターたち占領者の想定を超えたものであり、占領政策から逸脱する危険さえ孕んでいた。



宮田 章 (みやた あきら)

1961年、高知県生まれ。1986年、東京大学文学部を卒業後、NHK に入局、ディレクター、プロデューサーとしてドキュメンタリーや歴史番組の制作にたずさわった。現在、NHK 放送文化研究所チーフリード。

NHKドキュメンタリーの源流 それはラジオから始まった

著者 宮田 章

初版発行 2022年9月10日

発行 地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階 Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937 http://chijinkan.com

©2022 Akira Miyata



電子版

1,250円(税込み)

https://chijinkan.com/e-books https://www.amazon.co.jp